



キャンパス・コラム

心の時代

世界中が注目する情熱的な指揮者である大植英次氏がNHKの「トップランナー」に出演した番組を見て、吸い込まれるような感動を覚えた。世界的な指揮者になるため、小沢征爾氏がボストンフィルを率いて帰郷した時、滞在先のホテルに出向き、10時間以上も待って指揮を更に学びたい事を告げた。パワーだけではない、緻密、綺麗、滑らかな音と賞賛される奥義がある。「その情熱が演奏する作曲家に対する尊敬から生まれた」と述べていたのが印象的だった。尊い生命、あるいは勉強や習い事の対象への尊敬や深い愛情、そして日々の地道な努力があってこそ、本物の実が結ぶのである。魅了されてはじめて、人を魅了できる。フジ子・ヘミングも魂でピアノを弾き、誰かがわかってくれることを信じて、人の心をとらえた。久保田一竹氏は40歳からスタートして、60歳に「辻が花染め」を成功させ、日本の美しい四季や自然をテーマ

とした着物シリーズを芸術として仕上げた。人に訴えられるような情熱や思いやりが近代的「時計」の時間の流れのなかで失われつつある一方で、戦争や心が痛む犯罪、必要のない犠牲が毎日のようにニュースに出ている。限られた命を有効に使い、調和の世界を作ることの大切さを再認識して、家庭・学校・社会がゆとりのあるところ、思いやるところを、まず育てなければならない。個人や国家・民族が相互理解のために努めることが大切である。相手の立場に立って考えたら、違う結論になるかも知れない。いま、自分の文化をよく知らない学生が意外に多い。近代的時間と違ったもうひとつの時間認識を生み出したものこそがその地域や社会固有の文化であり、その文化を知ることが異文化理解のうえでも非常に重要なことになる。尊敬できるひとや事柄を見つけて、情熱を注ごう。リラックスしたい時に、非日常的な時間と空間を見つけて、心のゆとりを取り戻すのがいい。人生に対する情熱、「和敬清寂」の日本の茶のところが現代人にとって必要だ。

広報委員 彭 浩（総合政策学部助教授）